

CHUSUGI ✕ BUNGA KUBU

スチューデント・ライブラリアン
活動報告

vol.4 - 2017年度



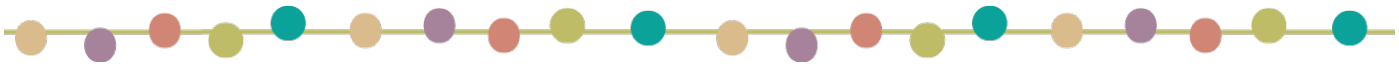
2017 年度

スチューデント・ライブラリアン活動報告

目 次

・ 図書との出会い／図書館との出会い				
	文学部長	宇佐美 毅	…	1
・ スチューデント・ライブラリアンに期待する				
	文学部長補佐	山科 満	…	2
・ 協働活動が生み出す新たな試み				
—2017 年度のスチューデント・ライブラリアン活動について—				
	中央大学杉並高等学校教諭	大山 裕隆	…	3
・ スチューデント・ライブラリアン 4 期生活動記録			…	5
・ スチューデント・ライブラリアン活動報告				
	文学部 人文社会学科 国文学専攻 3 年	横田 結莉奈	…	8
	文学部 人文社会学科 社会情報学専攻 1 年	尾崎 佳帆	…	8
	文学部 人文社会学科 社会情報学専攻 1 年	小宮 里菜	…	10
	文学部 人文社会学科 社会情報学専攻 1 年	杉山 里菜	…	12
・ リエゾン文庫書目一覧			…	14





図書との出会い／図書館との出会い

文学部長 宇佐美 毅

【図書館と私】

私は日本文学を専門としているので、「小さい頃から本が好きだったんでしょ」と人から言われることがよくあります。しかし、実際はぜんぜん違います。基本的にはスポーツが好きで、自分でスポーツをするのも見るのも大好きな子どもでした。手塚治虫のマンガや推理小説くらいは読んだと思いますが、本にはほとんど興味がなく、まして「図書館」などというものには、まるで縁がありませんでした。

転機は高校生のとき。周囲のませた同級生が、太宰治がどうかヘルマン・ヘッセがどうか言うのを聞いて、少しは読んでみるかと思ったことがきっかけでした。そのとき、私の通っていた高校から自転車で数分のところに県立図書館があり、昼休みにそこへ行っては、本を借り始めました。はじめはいわゆる純文学ではなく、娯楽作品ばかり借りていましたが、いつのまにか本の魅力に取りつかれ、手当たり次第に本を読むようになっていきました。

【進路選択にあたって】

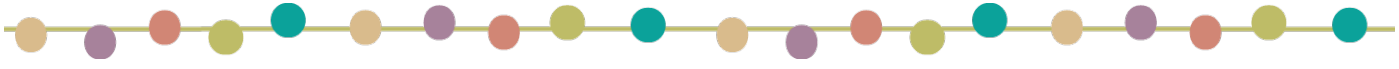
そのうちに高校3年生になり、運動部の活動からも引退となりました。高校卒業後は教員養成学部に進もうと考えましたが、教科はなかなか絞れません。比較的得意だった「数学」、スポーツ好きなので「体育」も考えたのですが、その頃すっかり読書好きになっていた私は、答えが必ずしも決まっていなために生徒と考えをぶつけ合うことのできる「国語」という教科に魅力を感じ始めていました。結局、教員養成学部の「国語」専攻に進学することになったのは、いわば本や図書館との出会いによって、私の進路が導かれたからと言ってもいいでしょう。それほど、私の人生にとって、本との出会い、図書館との出会いは大きな出来事だったのです。

【スチューデント・ライブラリアンの活動】

文学部と中央大学杉並高校の間でおこなわれてきたスチューデント・ライブラリアンの活動は、今年4年目を迎えました。前文学部長の都筑学先生、中央大学杉並高校の坂田聡前校長、飯塚容校長、山岸竜生副校長、駒ヶ嶺泰暁先生、大山裕隆先生、文学部教員の阿部成樹先生、大田美和先生、山科満先生、山崎久道先生（昨年ご退職）、文学部職員の野沢拓也さん、澤田あかねさん、大貫寿仁さん、曾我文子さん、矢口勇哉さん、ほかにも多くの方たちのサポートによって、この活動は支えられてきました。そして何より、今年参加した4人の学生たちの努力が、この活動を輝かしいものにしていました。

高校生が読みたいと感じた本にタグを付けてもらう活動、作品のどのような要素が高校生に受け入れられるかを示した表作成など、高校生に本への関心を高めてもらうための工夫がたくさんなされていました。そんな学生たちの報告を聞いて、おおいに頼もしく感じられました。もしかしたら、学生たちの活動をきっかけにして高校生が何かの本を読み、それがその人の考え方に影響したり、進路選択にかかわったりするという出来事が、図書館のどこかで起こっているのかもしれない。だとすれば、ライブラリアンとは、そうした出会いを応援することができる、なんと素晴らしい仕事なのでしょうか。

このスチューデント・ライブラリアンの活動が、活動に参加する人、かかわる人すべてに、豊かな出会いをもたらすことを心から願っています。



スチューデント・ライブラリアンに期待する

文学部長補佐 山科 満


「今どきの若者は・・・」という言葉はけっして口にするまいと長いこと決めていたのですが、最近は我慢しきれずに続きを言うてしまうことがあります。それは、「本を読まなくなった」ということです。精神科医なのに脳科学よりも文系の読み物が好きな私は、授業で夏目漱石や村上春樹の作品にはよく言及します。学生もそれに応えて、コメントペーパーで自分の読んだ小説を元に質問したり、時には次の授業で取り上げて欲しい本や作家を書いてきたりします。小説の話題を介して学生と交流することが、私の授業ではごく当たり前にあったのです。

しかしこの 2、3 年、学生の反応が確実に悪くなってきました。私の授業が下手になったのかと真剣に悩みましたが、昔も今も下手であることに変わりはなく、変わってきたのはどうも学生の側らしいと私は思い至りました。というものの、「自分はあまり本を読まない（ので先生の授業はよくわからない）」という学生のコメントが数年前から次第に増えて、今年はどうとう「小説というものを初めて読みました」という声を、しかも何人もの学生から（！）もらうことになったからです。文学部ですよ、ここは。

デジタルネイティブの大学生が私の目の前に現れたのもこの 1、2 年です。彼らは中学生の頃からケータイ小説を読み、高校生以降はスマホが提供する SNS 環境の中で、インスタに象徴されるような断片的な物語を相互交流の手段としてきたのかもしれない。重厚な物語世界に没入したければ RPG が待っているのでしょう。紙の小説など出番があろうはずがありません。

と決めつけていたところで、スチューデント・ライブラリアンという呼称に出会いました。司書を目指す文学部生が附属校の図書室に赴いて本の魅力を高校生にアピールする、という企画を聞いて真っ先に浮かんだのは「大丈夫か？」ということです。「今どきの若者」と決めつけた、失礼な話です。ところがその学生たちはみな「本好き」を自認し、小説に限らず実に多くの本を読んでいた。作成されたパンフレットでは、高校生たちにさまざまな本を、しかも初級・中級・上級とランクづけしながら紹介しています。私が読んでいない本や、中には知らない本もあり、仕事の手を止めパンフを読みつつ空想に耽り、学生が薦める何冊かの本を購入することになりました。これが杉並高に置かれたときに保護者の方が持ち帰りあっという間に無くなった、というのもうなずけます。それくらい充実した内容でした。これを 3 年生 1 人、1 年生 3 人の 4 名の文学部生が作った、というのも嬉しい驚きでした。

学生には本を読んで欲しい。切に、そう願います。パソコンやスマホから流れ出す情報は、向こうから軽やかにやってきてくれますが、いつも何かを忘れてきます。反対に紙の本は、こちらから向かっていかなければならず、手間はかかりますが、一旦その世界に入り込むと本は読者を迎え入れて、書かれている内容以上の何かを教えてください。スチューデント・ライブラリアンの人たちは、そんな「紙の本ならではの魅力」を知っている人たちなのでしょう。彼女たちに触発された高校生が「本好き」になり、そこから次のスチューデント・ライブラリアンが育ってくれることを期待します。



協働活動が生み出す新たな試み

—2017年度のスチューデント・ライブラリアン活動について—

中央大学杉並高等学校教諭 大山 裕隆
(高大連携担当)

はじめに

本年度のスチューデント・ライブラリアン活動は、大学生4名、杉並高校2名の計6人の参加者がありました。延べ日数を数えると、10日以上にわたり大学生は多摩から1時間以上かかる本校に足を運び、意欲的に活動に取り組んでくれました。私は過去4年間にわたり、この活動に関わってきました。年々内容が充実してきているのはもちろんですが、毎年驚かされるのが大学生・高校生たちの発想の柔軟さです。そして、大学生と高校生が共同活動をすることで、お互い刺激しあい、新たな発想が出てきているのではないかと考えています。

第4期目となる今年度の活動は、主に4つのことを中心に行いました。1「リエゾン文庫の活性化」2「文化祭での展示発表」3「読書会」4「図書館業務の実習」がその4つです。1に関しては、2の文化祭での発表に含まれていたため、1と2についてまず説明し、そのあと3について触れていきたいと思えます。4に関しては、まとめにおいて簡単に触れたいと思えます。

文化祭発表

文化祭での発表は、主に二つのことを行いました。ひとつはリエゾン文庫に関する発表で、もうひとつは「どうやって自分が好きな本にであうか？」というテーマです。

ひとつめのリエゾン文庫の活性化は、第1期のスチューデント・ライブラリアンから引き継がれているテーマです。リエゾン文庫とは、中央大学13専攻の先生方から推薦していただいた、高校時代に読んでおいた方がよい、お勧めの本のことです。杉並高校の図書館にはリエゾン文庫のコーナーがあり、文学部志望者が進路選択をする際などに利用しています。昨年度までの活動では、リエゾン文庫そのものを、ポップなどを使って紹介するというものが主でした。しかし、今年度特筆すべきは、リエゾン文庫に親んでもらうために、工夫をしたところです。それぞれのリエゾン文庫関係しているような小説をおたがい持ち寄り、それを発表するという形になりました。小説という、多くの人たちが慣れ親しんだ形式を通すことで、今までよりもずっと厚みのある内容となりました。各13専攻に関する小説の本が、大きな模造紙に書かれた紹介文と共に大変見やすいレイアウトで展示され、来校者の目を引いていました。

もうひとつのテーマに関しても、ライブラリアンたちの若々しい感性が発揮されていました。事前の準備段階で、本の種類や出会い方を図式化し、どんな本を読んだらよいのかわからない人たちに、どのようにしたら自分に合った本の見つけ方を伝えることができるか、ということを入念に討議しました。この成果は、冊子としてまとめられ、印刷したものは文化祭期間中に全て来校者によって持ち帰られました。

こうした成果は、教員が導いたものではなく、あくまでもライブラリアンたちの話し合いの中で生まれてきたものです。高校教員はあくまで時間設定や、模造紙など必要な物を準備しただけで、大きく介入することはありませんでした。大学生から提案がされると、本校の生徒から高校生に分かりやすい提

示方法について意見が出され、普段は異なる生活している者同士の協働活動が様々なものを生み出す様子を見て取ることができました。

読書会

読書会は、昨年度から始まりました。これもライブラリアンたちが自発的に始めたことです。ひとつの作品を掘り下げて読んでみたいという気持ちが、若い人たちの中にこんなにもあるのかと、正直なところ驚きました。

本年度は、二冊の本を取り上げ、それぞれ 2 時間にわたり議論しました。重松清『青い鳥』と志賀直哉『小僧の神様』です。どちらもオブザーバー的に参加しましたが、とても興味深いものでした。『青い鳥』に関しては、いくつか読みのポイント、問を投げかけた時以外はずっと私は黙っておりました。主人公の男性教諭の特徴から小説の構造に至るまで、たくさんの議論がなされ、充実した時間を彼らは過ごすことができたのではないかと思います。『小僧の神様』に関しては、少々論じるのが難しく、この短編だけでは何かまとまった論考を引き出すのは難しいようでしたが、議論は十分に深まりました。私自身ももともとは文学研究の真似事のようなことをしておりましたので、彼らの議論を懐かしい思いで見えておりました。この活動も、大学の授業なので議論の仕方を知っている大学生と、新鮮な切り口で作品を読んでくる高校生とのやりとりを大変面白く聞いていました。

まとめ・次年度への展望

このほかには、本校の図書館職員の指導による本のラベルを実際に張ってみる実習などがありました。図書館の実習というと、こうした事務的なものを思い浮かべがちですが、スチューデント・ライブラリアンたちの活動を見ていると、発信型の図書館というものの可能性を、私自身が学ぶことができました。参加した大学生の一人から「大学で学んだことを活かすことができなかった」という反省がありました。来年度以降は、図書館情報学など、学生たちが学んでいる分野に関わるような活動もできれば、より発展的なものになるのではないかと考えております。また、そういう分野に関して、高校生が興味を持ち、新たな発想で面白いアイデアが生まれることも期待しています。

このように充実した活動になりましたのは、多くの大学関係者の方々の大きな援助があつてのことです。文学部の先生方、事務室の方々など、たくさんの方々に支えていただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。来年度以降も、より充実した活動となりますよう、よろしくご指導いただければと思っております。





スチューデント・ライブラリアン 4 期生 活動記録

2017年度

応募期間 4月1日（土）～5月12日（金）

選考方法 書類審査・面談

面談日程 5月22日（月）、5月23日（火）

応募者数4名 採用者数4名

第 1回派遣 6月 17日（土）

第 2回派遣 7月 15日（土）

第 3回派遣 8月 3日（木）

第 4回派遣 8月 25日（金）

第 5回派遣 9月 2日（木）

第 6回派遣 9月 14日（木）

第 7回派遣 9月 15日（金）

第 8回派遣 9月 16日（土） 緑苑祭（文化祭）

第 9回派遣 9月 17日（日） 緑苑祭（文化祭）

第10回派遣 11月 11日（土）

第11回派遣 11月 18日（土）

第12回派遣 12月 12日（火）

活動報告会 12月 13日（水）

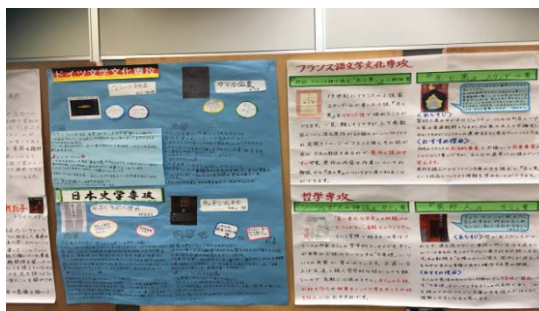
【スチューデント・ライブラリアン活動報告】

文学部 人文社会学科 国文学専攻 3年

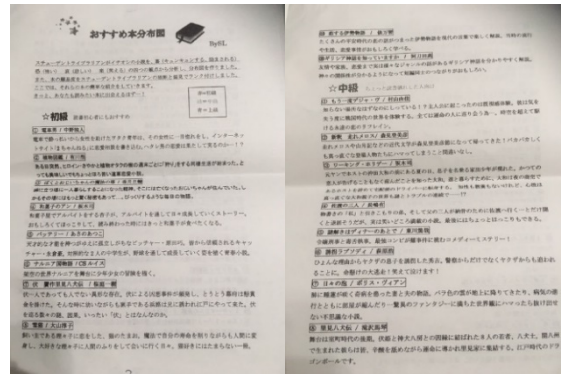
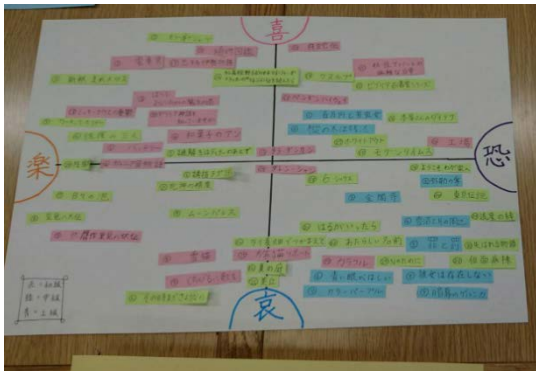
横田 結莉奈

私がスチューデント・ライブラリアンの活動に参加したのは司書の仕事に興味があったことや読書推進活動を行えることに魅力を感じたからでした。実際に活動を始めてみると、自分と同じように本が好きの人が集まって、一緒に活動できたことはとても楽しく、またとても貴重な体験をすることができたように思います。

今年度の活動は主に①緑苑祭での企画展示と②読書会の2つを行いました。まず①緑苑祭での企画展示についてです。緑苑祭での企画は、高校生にもっとリエゾン文庫に興味を持ってもらえるにはどうすればいいのか、という話し合いから始まりました。その結果、リエゾン文庫は高校生にとっては「難しそう」とか「堅苦しい」といったようなイメージを持たれやすいため、13専攻それぞれの分野に関する小説を一緒に紹介することで、親しみやすい小説を入口としてリエゾン文庫にも興味を持ってもらえるのではないかと考えました。メンバーで分担して、各専攻のリエゾン文庫を読み、それに関する小説を選びました。緑苑祭では模造紙でその紹介をし、実際にリエゾン文庫と小説も手に取れるように展示しました。思っていたよりも時間がなく、緑苑祭当日までに完成できるか不安でしたが、完成したものを飾り終えた時はとても達成感がありました。当日は、来場して下さった方に展示の内容について質問をしていただいたり、実際に本を手にとって見ていただくことができました。



また緑苑祭では、メンバーのおすすめの小説を紹介する冊子も作成して、来場者に配布しました。普段、あまり小説を読まない人やどんな本を読んだらいいのかわからない人のために、本好きなメンバーのおすすめの小説を難易度と読後の感想（喜、恐、哀、楽）で分類して紹介したものです。また新しい本に出会う方法も簡単にまとめて紹介しました。この冊子の作成にあたってはなかなか方向性が決まらなかったため、何度も話し合いをして、とても苦労しました。しかし、どんな小説を紹介するか話し合うなかで、メンバー同士で互いに好きな小説やその感想を言い合ったりすることは、とても楽しく、活動を通しての一番の思い出となりました。紆余曲折を経て完成した冊子は緑苑祭当日、すべて配布することができました。

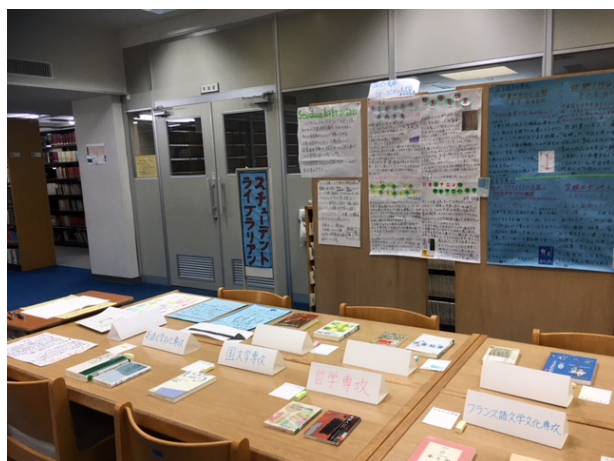


次に②読書会についてです。メンバー各自が読書会で話し合いたい小説を挙げて、そのなかで投票した結果、重松清の『青い鳥』と志賀直哉の『小僧の神様』についての2回、読書会をすることになりました。私は2回目の『小僧の神様』の読書会にのみ参加しました。高校の先生にもご助言をいただきながら、一人で読んでいた時には分からなかったことを知ることができて、作品について以前より深く理解することができたように思います。また、私は大学の授業で文学作品について議論をすることはありましたが、読書会をすることは初めてでした。どんなふうに話しを進めていけばよいのかといったことが分からず、あまりスムーズに話し合いが進まなかったのですが、またどこかで機会があれば挑戦してみたいと思いました。

約半年間の活動を振り返ってみると、自分たちで自由にやりたいことができる楽しさがあった一方で、その難しさも感じました。特に限られた時間のなかで、自分たちのやりたいことを自分たちのできる範囲でどうやってかたちにしていくかを考える作業は大変でした。しかし、メンバーみんなで何度も話し合い、協力して模造紙や冊子を作り上げることができた時はとても達成感があり、良い思い出となりました。また、高校生も積極的に協力してくれて、一緒に活動できたことを嬉しく思います。活動に参加することを決める前は役に立てるかあまり自信がなく、迷っていたのですが、思い切って参加してみてもよかったです。

ご指導してくださった先生方、活動をサポートして下さった方々には大変お世話になりました。そして、自分と同じように本が好きなメンバーと一緒に活動できて、とても楽しかったです。ありがとうございました。

私がスチューデント・ライブラリアンについて知ったのは、入学して間もない頃のことでした。高校時代から司書資格を取得したいと考えていた私は、掲示板に貼ってあったライブラリアン募集の広告を見て興味を持ちました。活動への参加を迷っていた矢先、履修していた図書館情報学概論の授業で、授業を担当していらっしゃる小山先生がおっしゃった、「司書資格を取得しようと思っている人はとても勉強になるので体験してみるといい」という言葉に背中を押され、参加を決めました。本来、この活動は2年生以上の司書課程を履修している生徒にしか参加資格がありませんでしたが、2年生以上の参加希望人数が少なかったため、特例として参加を認めていただきました。図書の知識を全く持っていない状態で参加することに当初はとても不安を抱いていましたが、現在活動が終わって思うことは、やってよかったという一言に尽きます。

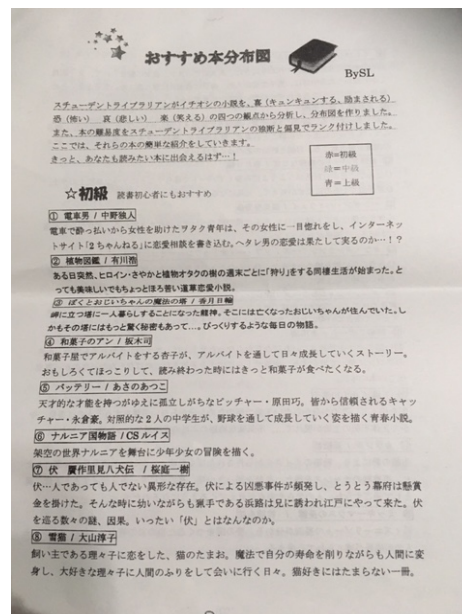
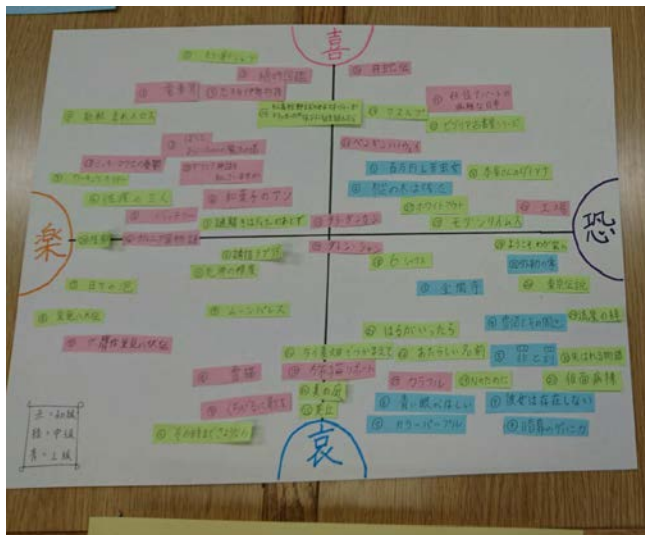


今年度の活動は、主に二つのことを行いました。文化祭での展示と、読書会です。まず、文化祭での展示についてです。このスチューデント・ライブラリアンの活動の目的のひとつに、リエゾン文庫の紹介というものがありません。リエゾン文庫とは、中央大学の附属生に文学部の各専攻について知ってもらうために設置された図書のことで、中には文学部の教職員の方々が書かれた本もあります。これについて理解してもらうために私達は、リエゾン文庫と、それにまつわる小説の展示を行うことに決めました。私は中国言語文学専攻の「死者たちの七日間」というリエゾン文庫と、中国にまつわる小説である「故郷/阿Q正伝」を模造紙にまとめて紹介しました。小説の展示を行うことによって、リエゾン文庫をより身近に感じてもらい、ひいては各専攻に興味を持ってもらおうという算段です。また、実際に本を展示し、模造紙を見て読みたくなった本に付箋で投票をしてもらうという工夫もしました。「死者たちの七日間」は、中央大学文学部の飯塚容教授が翻訳されたリエゾン文庫で、実際にこの展示を教授に見ていただくことが出来ました。とても緊張しましたが、展示を褒めていただけたのでよかったと思います。

文化祭はリエゾン文庫の紹介だけではなく、「おすすめ本分布図」の作成も行いました。メンバーそれぞれが、自分のおすすめしたいと思う作品を挙げ、読了後どのような感情になるのか、と、その作品の



難易度を独断と偏見で決定し、図化したものです。また、作品一つ一つの簡単な紹介文も書きました。分布図を作成するにあたって、読了後の感情をどのように分類するか、や、どんな紹介文を書けば作品に興味を持ってもらえるか、など、悩む点が沢山ありました。完成するまでに長時間を要しましたが、全員で協力し、納得のいく図を作成することが出来ました。



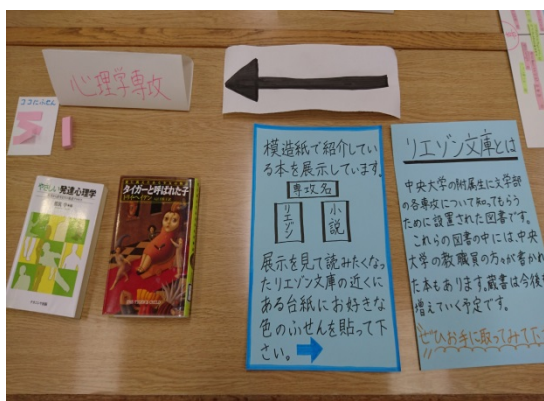
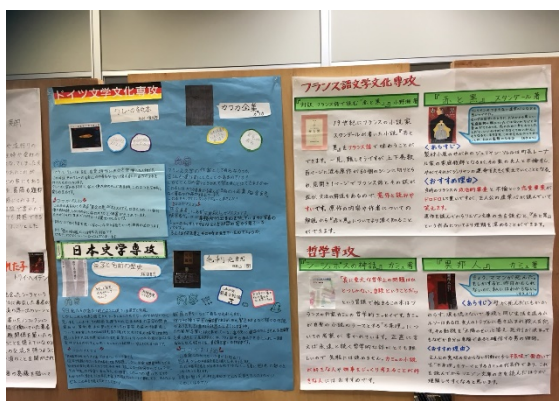
次に読書会についてです。読書会は、現代小説から重松清の「青い鳥」、文豪の短編小説から志賀直哉の「小僧の神様」を取り上げて、二日に分けて行いました。初日の「青い鳥」はまず、主人公である村内先生がこの小説ではなぜ吃音というハンディを持っているのか、という議題から始まり、最終的にこのタイトルの意味を考えました。二日目の「小僧の神様」は、作者があえてこの物語の続きを書かなかった理由を中心に議論を行いました。同じ読書会でありながらも、二日間の雰囲気は全く違いました。「青い鳥」は比較的とっつきやすい文章であったため議論がどんどん進みましたが、「小僧の神様」は文章が短く、本文から何かを感じ取ることが難しかったため、ひとりひとりが黙って考え込む時間が多いように感じました。どちらの読書会も、みんなで立てた問いに答えていく作業が楽しく、結論が出た時には大きな喜びを感じました。

全ての活動を学生主体で行うことが出来たため、責任も大きいですが、文化祭の展示が成功したり、読書会で答えが見つかった時の達成感は何にも変え難いものでした。もし、少しでもスチューデント・ライブラリアンの活動に興味があれば、ぜひ参加してほしいと思います。

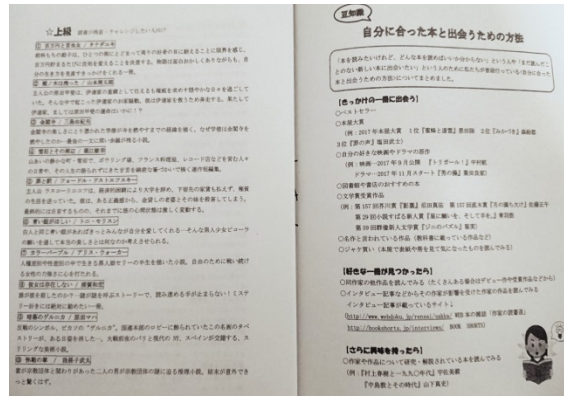
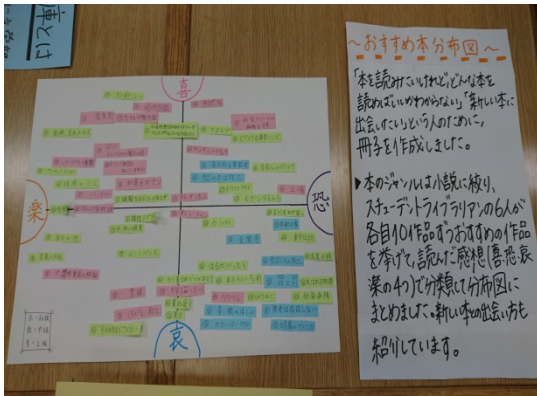
私は、幼いころから本が好きだったこともあり司書の仕事に興味があったのでスチューデント・ライブラリアンの活動に参加しました。また、今年度は司書課程を履修していない1年生にも応募資格があるということ、高校生と一緒に活動の内容から考えることができるという点に魅力を感じて応募しました。

今年度は大きく分けて、緑苑祭での展示と読書会の2つの活動をしました。

まず、緑苑祭での活動についてです。私たちは、リエゾン文庫の紹介を含めた展示とおすすめ本分布図を冊子にしたものの配布を行いました。文学部の各専攻の先生方のおすすめの本を附属高校に配架しているのがリエゾン文庫なのですが、読んだことがある学生が少ないことから、より多くの高校生に手に取ってもらえるようにこれらの本を中心にした展示を行いました。リエゾン文庫の展示では、それぞれが各専攻1冊ずつ気になる本、おすすめしたい本を選び、それに関する小説や詩集と一緒に展示しました。こうすることで、身近で読みやすい本を通してリエゾン文庫に興味を持ってもらえるのではというアイデアが出たからです。専攻ごとに模造紙の左側にリエゾン文庫を右側に関連する本を紹介し、レイアウトも各自で工夫しました。さらに、興味を持った本を実際に手に取ってもらえるように机に実物の本を並べ、いいなと思った本のところに目印として付箋を貼ってもらいました。



おすすめ本分布図は、本との出会いをサポートするためにスチューデント・ライブラリアンの6人がそれぞれ10冊ずつおすすめの作品を挙げ、喜（励まされる、キュンキュンする）・恐（怖い、気持ち悪い、考えさせられる）・哀（泣ける）・楽（わくわくする、笑える）の4種類に分類したものです。さらに、これらの作品の難易度を初級・中級・上級にランク付けし、より本選びの参考になるように工夫しました。また、自分たちが普段本選びに使っている方法も豆知識として掲載し、1冊の冊子にまとめて配布しました。用意した冊子はすべて配布し、内容にもご好評をいただきましたが、図書室に寄る人の数があまり多くはなかったため、まず図書室に来てもらう工夫をもう少しするべきだと思いました。



次に、読書会についてです。読書会は2回行い、現代小説と少し硬めな短編小説のタイプの違う本を話し合いで決め、その2冊に挑戦しました。1回目は重松清の『青い鳥』、2回目は志賀直哉の『小僧の神様』について話し合いました。手探りの状態で、先生方にも協力してもらいながら、作品の内容に関してそれぞれの意見や解釈も交えて理解を深められたと思います。しかし、今回の経験から普通に読む際は読みやすく楽しめる作品も、読み深めていくと解釈が難しいということを知り、読書会の難しさや作品選びの大切さを知りました。

さらに、最後の活動日には、学校司書の仕事の1つである本の整備を体験することができ、自分が普段何気なく借りている本のひとつひとつに手間がかかっていること、図書館の管理の大変さや大切さを改めて感じました。

限られた時間で、企画から自分たちだけであるということは、大変なことも多かったですが、とても貴重な経験になりました。さらに、本が好きな、自分とは違った考え方を持つメンバーと活動を共にできたことは自分にとってとても刺激になりました。スチューデント・ライブラリアンの存在を知った時に勇気を出して応募したことを心からよかったと思います。たくさんの方にサポートしていただき、充実した時間を過ごせたことをありがたく思います。

杉山 麻子

私がスチューデント・ライブラリアンの活動に参加した理由は二つあります。一つは、社会情報学専攻の図書館情報学コースに所属していて、図書館について学んでいるからです。大学で学んだことが、少しでも活かせるかなと思い参加しました。二つ目は、大学生のうちに積極的に様々な活動に参加したいと考えていたからです。ソフトボール部に所属していて多少忙しいのですが、思い切って参加してみることになりました。

今回の活動はとても充実したものになりましたので、その活動内容について説明します。私たちは3つの活動をしました。

- 1、緑苑祭、展示発表のポスター作り
- 2、緑苑祭、冊子作り
- 3、読書会

1つ目の緑苑祭での展示発表は、リエゾン文庫の紹介をしました。リエゾン文庫とは、中央大学の教授が自分の書いた本やお勧めの本を中央大学杉並高校に寄贈した本の事です。リエゾン文庫を高校生にぜひ読んでもらいたいと思い、より手に取りやすくするためにリエゾン文庫に関係する小説や評論と一緒に紹介する形でポスター発表を行いました。例えば、西洋史学専攻のリエゾン文庫と、原田マハの『暗幕のゲルニカ』という本と一緒に紹介という感じです。『暗幕のゲルニカ』は本屋大賞にノミネートされ、有名で、手に取りやすいと思うので紹介することを決めました。緑苑祭当日は、ポスターの前に紹介している本を並べました。こうすることによって、ポスターを見ながら、ぱらぱら本をめくれるよう工夫しました。



2つ目は本を読みたいけどなかなか良い本に巡り合えない、何を読んでいいのかわからない人にむけて、本の紹介の冊子を作りました。この冊子には、おすすめの本の分布図とその本の紹介を載せました。各自が10冊ずつおすすめの本を出し合い、喜・恐・哀・楽 4つに分類し、さらに私たちの独断と偏見

でその本の難易度を決めて、初心者向け、中級者向け、上級者向けと3つに分類しました。この冊子はとても好評で準備した分の冊子は全て配布しました。部活の友達にもこの冊子を見せたところかなり好評だったので、作って良かったと思いました。

3つ目は、読書会です。重松清の青い鳥と、志賀直哉の小僧の神様を扱いました。各自事前に読んできて、意見交換しました。初めての読書会だったので、あまりスムーズに進行することが出来なかったのですが、読んだ本の感想や、意見を言うことはほとんどないので、とても貴重な体験になりました。

この活動を通して良かったことは、良い仲間に出会えたことです。高校生2人大学生4人、計6人での活動だったので、高校生、大学生の垣根を超えて、様々な提案をしたり、おすすめの本を紹介しあったり、自由な意見を言えたのはとても良かったと思います。本が好きな人の集まりだったので、お互い読んだことのある本の話は大盛り上がりでした。反省点としては、司書の資格を取ろうとしている人しか参加できないのにもかかわらず、活動内容が、誰でもできる内容だったということです。今年は3年生が1人、1年生が3人でした。私自身、来年は司書資格の為に必要な授業をたくさん取る予定なので、来年以降に十分に改善できる点だと思います。

活動報告会に参加して、年々活動が充実してきていることを知りました。大学4年間のうちに様々なことにチャレンジすることは大切だと思います。少しでもスチューデント・ライブラリアンに興味があれば、参加してみてください。良い仲間に出会えること間違いありません！

リエゾン文庫書目一覧 (2018年3月25日現在)

題目	著者等	出版社	配架先*
国文学専攻			
宇佐美ゼミ 第十六号 報告集 文学部国文学専攻 2013	宇佐美毅	宇佐美ゼミナール 報告集	杉並
学研まんが 日本の古典 まんがで読む万葉集・古今和歌集・新古今和歌集	吉野朋美 監修	学研	杉並
後鳥羽院 コレクション日本歌人選 028	吉野朋美	笠間書院	杉並
西行全歌集	久保田淳・吉野朋美 校注	岩波文庫フェア	杉並
武士の家計簿 —「加賀藩御算用者」の幕末維新	磯田道史	新潮新書	杉並
大学授業がやってきた! 知の冒険	桐光学園特別授業	水曜社	杉並、横浜
テレビドラマを学問する	宇佐美毅	中央大学出版部	杉並、横浜
中島敦『李陵・司馬遷』定本篇	中島敦	中島敦の会	杉並、横浜
中島敦『李陵・司馬遷』図版篇	中島敦	中島敦の会	杉並、横浜
中島敦とその時代	山下真史	双文社出版	杉並
2014年度 第17号 宇佐美ゼミ報告集	宇佐美毅		杉並
白門國文 第26号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第27号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第28号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第29号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第30号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第31号	中央大學國文學會		横浜
村上春樹と一九八〇年代	宇佐美毅、千田洋幸 編	おうふう	杉並、横浜
村上春樹と一九九〇年代	宇佐美毅、千田洋幸 編	おうふう	杉並、横浜
慶安の触書は出されたか (日本史リブレット)	山本英二	山川書店	杉並
中央大学國文 第56号	中央大學國文學會		横浜
中央大学白門國文 第57号	中央大學國文學會		横浜
英語文学文化専攻			
愛の技法 クリア・リーディングとは何か	中央大学人文科学研究所編	中央大学出版部	杉並、横浜
アメリカ太平洋研究 Vol.16 March 2016	東京大学大学院総合文化研究科 アメリカ太平洋地域研究センター		杉並、横浜
アン・ブロンテ 二十一世紀の再評価	大田美和	中央大学出版部	杉並、横浜
英国小説研究 第22冊	「英国小説研究」同人	英潮社	杉並、横浜
英米文学研究 第31号	兼武道子他	中央大学文学部 英米文学会	杉並
大田美和の本	大田美和	北冬舎	杉並、横浜
きれいな 大田美和歌集	大田美和	河出書房新社	杉並、横浜
葡萄の香り、噴水の匂い	大田美和	北冬舎	杉並、横浜
ブロンテ姉妹の世界	内田能嗣	ミネルヴァ書房	杉並、横浜
北冬 No.013	北冬舎	北冬舎	杉並、横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
ミッキーはなぜ口笛を吹くのか	細馬宏通	新潮選書	杉並
夜のミッキー・マウス	谷川俊太郎	新潮文庫	杉並
レクイエム	田口智子・絵、大田美和・短歌	エディション q	杉並、横浜
記者たちは海に向かった 津波と放射能と福島民友新聞	門田隆将	角川文庫	杉並、横浜
ドイツ語文学文化専攻			
クレーの絵本	谷川俊太郎	講談社	杉並
ジビレ・レヴィチャロフの小説『ブルーメンベルク』文化史 と不死性(ドイツ文化 第六十七号抜刷)	縄田雄二	中央大学ドイツ学会	杉並
ドイツ語資料から見た留学期の斎藤茂吉 (ドイツ文化 第五十五号抜刷)	縄田雄二	中央大学ドイツ学会	杉並
ドイツの歴史教育	川喜田敦子	白水社	杉並
ドゥルス・グリューンバイン詩集 墓碑銘・日本紀行	縄田雄二 編訳	中央大学出版部	杉並
マルセル・バイアー講演 翳 (紀要抜刷 文学科第九十号)	縄田雄二	中央大学文学部	杉並
フランス語文学文化専攻			
九十三年(上下)	ヴィクトル・ユゴー	潮文学ライブラリー	杉並
ゴヤ 啓蒙の光の影で	T.トドロフ、小野潮 訳	法政大学出版局	杉並
ジャン＝ジャック・ルソー 自己充足の哲学	永見文雄	勁草書房	横浜
十九世紀フランス文学を学ぶ人のために	小倉孝誠	世界思想社	杉並
西洋美術への招待	田中英道 監修	東北大学出版会	杉並
対訳 フランス語で読む「赤と黒」	小野潮	白水社	杉並
中大仏文研究 第45号	中大仏文研究会		横浜
中大仏文研究 第46号	中大仏文研究会		横浜
フクシマ・ノート 忘れない、災禍の物語	ミカエル・フェリエ、義江真木子	新評論	杉並、横浜
フランス革命と文学	ベアトリス・ディディエ	白水社	杉並
フランス 19 世紀絵画	阿部成樹 他	ホワイトインターナショナル	杉並、横浜
中国言語文化専攻			
現代中国のポピュラーカルチャー	飯塚容 他	勉誠出版	杉並
現代中国文化の光芒	中央大学人文科学研究所編	中央大学出版部	杉並、横浜
死者たちの七日間	余華、飯塚容 訳	河出書房新社	杉並
中国故事	飯塚容	角川ソフィア文庫	杉並、横浜
中国人エリートは日本人をこう見る	中島恵	日経プレミアシリーズ	杉並
中国の「新劇」と日本 「文明戯」の研究	飯塚容	中央大学出版部	杉並
富萍 上海に生きる	王安憶、飯塚容・宮入いづみ 訳	勉誠出版	杉並
霊山	高行健、飯塚容 訳	集英社	杉並
中国動漫新人類 日本のアニメと漫画が中国を動かす	遠藤誉	日経 BP 社	杉並
会うための別れ 過士行 短編小説集	菱沼彬晃 訳	晩成書房	杉並、横浜
父を想う ある中国作家の自省と回想	閻連科、飯塚容 訳	河出書房新社	杉並、横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
いま、世界で読まれている 105 冊 2013	TEN-BOOKS 編	テン・ブックス	杉並、横浜
日本史学専攻			
外務官僚たちの太平洋戦争	佐藤元英	NHK ブックス	杉並、横浜
魏志倭人伝の考古学	佐原真	岩波書店	杉並
3・11 複合災害と日本の課題	佐藤元英、滝田堅持	中央大学出版部	横浜
市民の考古学 4 考古学でつづる日本史	藤本強	同成社	杉並
昭和初期対中国政策の研究 田中内閣の対満蒙政策	佐藤元英	原書房	杉並
縄文社会研究の新視点 -炭素 14 年代測定の利用-	小林謙一	六一書房	横浜
中央史学 創刊号	中央史学会		横浜
中央史学 第 2 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 3 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 4 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 5 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 6 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 7 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 8 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 9 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 10 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 11 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 12 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 14 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 15 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 17 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 19 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 20 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 21 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 22 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 23 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 24 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 25 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 27 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 29 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 31 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 32 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 34 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 35 号	中央史学会		横浜
中央史学 第 36 号	中央史学会		横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
中央史学 第37号	中央史学会		横浜
日本の中世 12 村の戦争と平和	坂田聡、榎原雅治、稲葉継陽	中央公論新社	杉並
発掘で探る縄文の暮らし 中央大学の考古学	小林謙一	中央大学出版部	杉並、横浜
苗字と名前の歴史	坂田聡	吉川弘文館	杉並
民衆と天皇	坂田聡、吉岡拓	高志書院	杉並
東洋史学専攻			
アジア史における制度と社会	中央大学東洋史学研究室 編	白東史学会	杉並
池田雄一教授古稀記念アジア史論叢	中央大学東洋史学研究室 編	白東史学会	杉並
イスラム世界論 トリックスターとしての神	加藤博	東京大学出版会	杉並
環境から解く古代中国	原宗子	大修館書店	杉並
菊池英夫教授山崎利男教授古稀記念アジア史論叢	中央大学東洋史学研究室 編	刀水書房	杉並
サラディン イェルサレム奪回	松田俊道	山川出版社	杉並、横浜
中央大学 アジア史研究 第37号	白東史学会 中央大学文学部東洋史研究室		横浜
中央大学 アジア史研究 第38号	白東史学会 中央大学文学部東洋史研究室		横浜
中央大学東洋史学専攻創設五十周年記念 アジア史論叢	白東史学会	白東史学会	杉並
明代中国の疑獄事件	川越泰博	風響社	杉並
遊牧民から見た世界史 増補版	杉山正明	日本経済新聞出版社	杉並
四字熟語歴史漫筆	川越泰博	大修館書店	杉並
川越泰博教授 古稀記念アジア史論叢	中央大学東洋史学研究室 編	白東史学会	杉並、横浜
アンコール遺跡と社会文化発展 アンコール・ワットの解明4	石澤良昭 監修・坪井善明 編	連合出版	杉並、横浜
カンボジアの民話世界	高橋宏明 訳／編	めこん	杉並、横浜
西洋史学専攻			
英雄詩とは何か	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
近世ヨーロッパ軍事史	A・バルベロー	論創社	杉並
広義の軍事史と近世ドイツ —集権的アリストクラシー・近代転換期	鈴木直志	彩流社	杉並
哲学専攻			
愛の哲学、孤独の哲学	アンドレ・コント＝スポンヴィル、 中村昇、他 訳	紀伊國屋書店	杉並
ワイトゲンシュタイン ネクタイをしない哲学者	中村昇	白水社	杉並
ワイトゲンシュタイン「哲学探究」入門	中村昇	教育評論社	杉並、横浜
小林秀雄とワイトゲンシュタイン	中村昇	春風社	杉並、横浜
ささやかながら、徳について	アンドレ・コント＝スポンヴィル、 中村昇、他 訳	紀伊國屋書店	杉並
シーシュポスの神話	カミュ	新潮文庫	杉並
色彩について	ルートヴィヒ・ワイトゲンシュタイン、 中村昇、他 訳	新書館	杉並
ベルクソン=時間と空間の哲学	中村昇	講談社	杉並、横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
ホワイトヘッドの哲学	中村昇	講談社	杉並、横浜
母の発達	笙野頼子	河出文庫	杉並
どこでもないところからの眺め	トマス・ネーゲル、中村昇、他 訳	春秋社	横浜
社会学専攻			
【改訂版】戦後日本青少年問題考	矢島正見	一般財団法人 青少年問題研究会	杉並、横浜
家族革命	清水浩昭、森謙二、岩上真珠、山田昌弘	弘文堂	杉並、横浜
「家族」難民 生涯未婚率 25% 社会の衝撃	山田昌弘	朝日新聞出版	杉並、横浜
家族の衰退が招く未来 「将来の安心」と「経済成長」は取り戻せるか	山田昌弘、塚崎公義	東洋経済新報社	杉並、横浜
家族のリストラクチャリング 21 世紀の夫婦・親子はどう生き残るか	山田昌弘	新曜社	杉並、横浜
高校生のための人気学問ガイド	矢島正見	旺文社	杉並
「婚活」時代	山田昌弘、白河桃子	ディスカバー携書	杉並、横浜
少子社会日本 もうひとつの格差のゆくえ	山田昌弘	岩波書店	杉並、横浜
女性活躍後進国ニッポン	山田昌弘	岩波書店	杉並、横浜
震災婚 震災で生き方を変えた女たち ライフスタイル・消費・働き方	白河桃子	ディスカバー携書	杉並、横浜
新平等社会 「希望格差」を超えて	山田昌弘	文芸春秋	杉並、横浜
旅をして、出会い、ともに考える— —大学ではじめてフィールドワークをするひとのために	新原道信	中央大学出版部	杉並
中央社会学 第 22 号 2013	中央大学文学部社会学会		横浜
中央社会学 第 23 号 2014	中央大学文学部社会学会		横浜
なぜ若者は保守化するのか 反転する現実と願望	山田昌弘	東洋経済新報社	杉並、横浜
パラサイト社会のゆくえ データで読み解く日本の家族	山田昌弘	ちくま新書	杉並、横浜
パラサイト・シングルの時代	山田昌弘	ちくま新書	杉並、横浜
ワーキングプア時代 底抜けセーフティネットを再構築せよ	山田昌弘	文芸春秋	杉並、横浜
結婚クライシス (中流転落不安)	山田昌弘	東京書籍	杉並、横浜
モテる構造 男と女の社会学	山田昌弘	ちくま新書	杉並、横浜
社会情報学専攻			
インターネットが壊した「こころ」と「言葉」	森田幸孝	幻冬舎 ルネッサンス新書	杉並
うわさとは何か ネットで変容する「最も古いメディア」	松田美佐	中公新書	杉並、横浜
うわさの謎 流言、デマ、ゴシップ、都市伝説はなぜ広がるのか	松田美佐、川上善郎、佐藤達哉	日本実業出版社	杉並、横浜
SF映画で学ぶインタフェースデザイン アイデアと想像力を鍛え上げるための 141 のレッスン	NATHAN SHEDROFF, CHRISTOPHER NOESSEL	丸善出版	横浜
ケータイ学入門 メディア・コミュニケーションから読み解く 現代社会	松田美佐、岡田朋之	有斐閣	杉並、横浜
ケータイ社会論	松田美佐、岡田朋之	有斐閣	杉並
ケータイのある風景 テクノロジーの日常化を考える	松田美佐、岡部大介、伊藤瑞子	北大路書房	杉並、横浜
C言語によるスーパーLinux プログラミング	飯尾淳	softbank creative	横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
社会情報学ハンドブック	吉見俊哉、花田達朗	東京大学出版会	杉並
情報貧国ニッポン～課題と提言	山崎久道	紀伊国屋書店	横浜
図書館・アーカイブズとは何か	粕谷一希、菊池光興、長尾真 編	藤原書店	杉並
教育学専攻			
イチから始める 外国人の子供教育	臼井智美 編	教育開発研究所	杉並
教育学をつかむ	木村元、小玉重雄、船橋一男	有斐閣	杉並
まんが クラスメイトは外国人—多文化共生の物語	「外国につながる子供たちの物語」 編集委員会編	明石書店	杉並
心理学専攻			
面白いほどよくわかる！臨床心理学	下山晴彦	西東社	杉並
小学生の生活とこころの発達	心理科学研究会	福村出版	横浜
心理学論文の書き方 おいしい論文のレシピ	都筑学	有斐閣アルマ	杉並、横浜
中高生のためのメンタル系サバイバルガイド	松本俊彦 編著	日本評論社	杉並
やさしい青年心理学	白井利明、都筑学、森陽子	有斐閣アルマ	杉並、横浜
やさしい発達心理学 乳児から青年までの発達プロセス	都筑学	ナカニシヤ出版	杉並、横浜
その他			
アジア史における法と国家	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
アルス・イノヴァティーヴァ	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
イデオロギーとアメリカン・テキスト	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
埋もれた風景たちの発見 ヴィクトリア朝の文芸と文化	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
芸術のイノベーション	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
ツアロートの道 ユダヤ歴史・文化研究	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
民国前期中国と東アジアの変動	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並

配架先* 杉並＝中央大学杉並高等学校 横浜＝中央大学附属横浜高等学校









2017 年度

スチューデント・ライブラリアン活動報告書

平成 30 年 3 月 31 日 発行

©中央大学文学部